

23PO-am358

塩分味覚水準の異なる若年者における安静時血圧の比較

○竹田 真理¹, 長澤 吉則¹, 沼尾 成晴¹ (¹京都薬大)

【目的】

現在, わが国の高血圧症の患者数は年々増加傾向にある. 高血圧症の要因の一つに生活習慣があげられ, なかでも塩分の過剰摂取が血圧上昇に強く関連する. 塩分の過剰摂取の原因の一つに, 塩分味覚障害が挙げられる. しかしながら, これまでに若年者の塩分味覚と血圧の関連についてほとんど研究されていない. 本研究では, 塩分味覚レベルの異なる若年者における安静時血圧の差を明らかにすることを目的とする.

【方法】

20~35歳の若年者50名(男性23名, 女性27名)を対象とした. 測定項目は, 食塩及び亜鉛摂取量, 塩分味覚, 及び安静時血圧であった. 食塩及び亜鉛摂取量を食事摂取頻度調査票(FFQg)に基づき算出した. 塩分味覚は味覚検査キット(テーストディスク)を用いて, 左右の舌咽神経領域及び鼓索神経領域の4か所の塩分味覚を測定し, 認知閾値を得点化した. それらの合計得点により味覚高群(4~12点)と味覚低群(13~24点)の2群に分類した. 得点が低い程, 塩分味覚に優れる. 安静時血圧は, 全自動血圧計により収縮期及び拡張期血圧を計測した.

【結果・考察】

BMI, 食塩及び亜鉛摂取量, 及び塩分味覚に有意な性差は認められなかった. 一方, 男女の味覚高群及び低群の4群間の比較では, 男性の味覚低群の収縮期及び拡張期血圧は女性の味覚低群に比べて, また, 男性の味覚高群の拡張期血圧は, 男性の味覚低群に比べて有意に高値を示した. これらの結果は, 塩分味覚レベルの異なる若年者における安静時血圧に及ぼす影響には性差が存在することを示唆している.